

2018年度 山形県リハビリテーション科 専門研修プログラム（案）

目次

1. 山形県リハビリテーション科専門研修プログラムについて
2. リハビリテーション科専門研修はどのようにおこなわれるのか
3. 専攻医の到達目標（修得すべき知識・技能・態度など）
4. 各種カンファレンスなどによる知識・技能の習得
5. 学問的姿勢について
6. 医師に必要なコアコンピテンシー、倫理性、社会性などについて
7. 施設群による研修プログラムおよび地域医療についての考え方
8. 年次毎の研修計画
9. 専門研修の評価について
10. 専門研修管理委員会について
11. 専攻医の就業環境について
12. 専門研修プログラムの改善方法
13. 修了判定について
14. 専攻医が研修プログラムの修了に向けて行うべきこと
15. 研修プログラムの施設群
16. サブスペシャリティ領域との連続性について
17. 専攻医の受け入れ数について
18. 研修の休止・中断、プログラム移動、プログラム外研修の条件
19. 専門研修プログラム管理委員会
20. 専門研修指導医
21. 専門研修実績記録システム、マニュアル等について
22. 研修に対するサイトビジット（訪問調査）について
23. 専攻医の採用と修了

1. 山形県リハビリテーション科専門研修プログラムについて

リハビリテーション科専門医とは、様々な疾患によって生じる障害をリハビリテーションの観点から予防、診断、治療し、身体の機能回復、活動性の向上、社会参加を図る医師を指します。本研修プログラムは山形大学附属病院を含む複数の施設で様々なリハビリテーションを学び、標準的なリハビリテーションの知識と技術、経験を身につけるための構成となっています。

1) 到達目標

リハビリテーション科が扱う疾患や障害は①脳卒中、外傷性脳損傷など、②脊髄損傷、脊髄疾患、③骨・関節疾患、骨折、④小児疾患、⑤神経筋疾患、⑥切断、⑦内部障害、⑧その他（廃用症候群、がん、疼痛性疾患など）を中心として多岐にわたります。さらに早期に介入する急性期リハビリテーションから、回復期や維持期にわたる一人の患者について長期的に関わる点も特徴です。

一つの病院で幅広い疾患の急性期、回復期、維持期の全ての研修を行うことは困難なため、本プログラムでは急性期を主に扱う大学病院、回復期リハビリテーション病棟を持つ病院、小児療育センターなどで構成して、必要な研修分野を網羅しています。さらに、研修カリキュラムの項目、ならびに、項目ごとの到達目標については、日本リハビリテーション医学会研修カリキュラムに詳細を記載しています。

2) 教育ポリシー

山形大学附属病院は特定機能病院として高い専門性を有し、基本領域とサブスペシャリティの幅広い診療科における専門医研修体制を構築しています。県内唯一の大学病院であるため、専門性の高い疾患が全県から集まり、その治療に当たっています。内科、外科をはじめ各診療科との相互連携が緊密に可能な臓器別診療体制を整えています。リハビリテーション科は整形外科をはじめとする各診療科と連携し、全科の患者を対象としています。さらにがんセンターとして、がんの集約的な治療を行っていることから、がん患者へのリハビリテーションにも力を入れています。

山形大学大学院医学系研究科では4年間の医学研究科博士課程を履修することにより学位の取得が可能となります。臨床に従事しながら学位を取得する社会人大学院生枠を備えていますので、本プログラムの研修期間の一部と重複させて、学位を取得することも可能です。

本研修プログラムは、山形県のみならず東北、全国で活躍することのできるリハビリテーション専門医を育成することを目指しています。

2. リハビリテーション科専門研修はどのようにおこなわれるのか

1) 研修段階の定義：リハビリテーション科専門医は初期臨床研修の2年間と専門研修（後期研修）の3年間の合計5年間の研修で育成されます。

初期臨床研修2年間に、自由選択期間でリハビリテーション科を選択することもあります。この期間をもって全体での5年間の研修期間を短縮することはできません。また、初期臨床研修にてリハビリテーション科の研修が、専門研修（後期研修）を受けるにあたり、必修になることはありません。初期臨床研修が修了していない場合、たとえ2年間を経過していても、専門研修を受けることはできません。また、保険医を所持していないと、専門研修を受けることは困難です。

専門研修の3年間の1年目、2年目、3年目には、それぞれ医師に求められる基本的診療能力・態度（コアコンピテンシー）と日本リハビリテーション医学会が定める研修カリキュラムにもとづいてリハビリテーション科専門医に求められる知識・技術の修得目標を設定し、その年度の終わりに達成度を評価して、基本から応用へ、さらに専門医として独立して実践できるまで着実に実力がつくように配慮します。研修施設により専門性があるため、症例等にばらつきがでます。このため、修得目標はあくまでも目安であり、3年間で習得できるように、個別のプログラムに応じて習得できるように指導を進めていきます。山形県研修プログラムの修了判定には以下の経験症例数が必要です。日本リハビリテーション医学会専門医制度が定める研修カリキュラムに示されている研修目標および経験すべき症例数を以下に示します。

1. 脳血管障害・外傷性脳損傷など：15例
 2. 脊椎脊髄疾患・脊髄損傷：10例
 3. 骨関節疾患・骨折：15例
 4. 小児疾患：5例
 5. 神経筋疾患：10例
 6. 切断：5例
 7. 内部障害：10例
 8. その他（廃用症候群、がん、疼痛性疾患など）：5例
- 以上の75例を含む100例以上を経験する必要があります。

2) 年次毎の専門研修計画専攻医の研修は毎年の達成目標と達成度を評価しながら進められます。以下に年次毎の研修内容・習得目標の目安を示します。

専門研修1年目(SR1)では、基本的診療能力およびリハビリテーション科基本的知識と技能の習得を目標とします。基本的診療能力(コアコンピテンシー)では指導医の助言・指導のもと、別記の事項が実践できることが必要となります。

また、基本的知識と技能は、研修カリキュラムでAに分類されている評価・検査・治療の概略を理解し、一部を実践できることが目標となります。初年度の研修先病院は、専攻医の強い希望がない限り、基幹研修施設である山形大学病院リハビリテーション科としています。リハビリテーション分野の幅広い知識・技術が習得可能です。多くの診療科と連携して、基本的診療能力を磨き、専攻医としての態度をレベルアップすることが可能となります。指導医は日々の臨床を通して専攻医の知識・技能の習得を指導します。専攻医は、院内での研修だけでなく、院外活動として、学会・研究会への参加などを通して自らも専門知識・技能の習得を図ります。図1に習得目標を示してあります。詳細は研修カリキュラムを参考にしてください。

図1 専門研修1年目(SR1) 習得目標

基本的診療能力(コアコンピテンシー)

指導医の助言・指導のもと、別記の事項が実践できる。

基本的知識と技能知識：運動学、障害学、ADL/IADL、ICF(国際生活機能分類)など。

技能：全身管理、リハビリ処方、装具処方など。

上記の評価・検査・治療の概略を理解し、一部を実践できる。

詳細は研修カリキュラムを参照。

【別記】基本的診療能力(コアコンピテンシー)として必要な事項

- 1) 患者や医療関係者とのコミュニケーション能力を備える。
- 2) 医師としての責務を自律的に果たし信頼されること(プロフェッショナリズム)。
- 3) 診療記録の適確な記載ができること。
- 4) 患者中心の医療を実践し、医の倫理・医療安全に配慮すること。
- 5) 臨床の現場から学ぶ技能と態度を修得すること。
- 6) チーム医療の一員として行動すること。
- 7) 後輩医師に教育・指導を行うこと。

専門研修2年目（SR2）では、基本的診療能力の向上に加えて、診療スタッフへの指導にも参画します。リハビリテーション科基本的知識・技能を幅広い経験として増やすことを目標とします。特に1年目に経験できなかった技能や疾患群は積極的に治療に参加し経験を積むことを目指します。指導医は日々の臨床を通して専攻医の知識・技能の習得を指導します。専攻医も学会・研究会への参加に際して、ただ聴講するだけでなく、質問などの発言や発表できるよう心がけ、関連分野においても実践病態別リハビリテーション研修会 DVD などを通して自らも専門知識・技能の習得を図ります。図2に習得目標の概略を示します。詳細は研修カリキュラムを参考にしてください。

図2 専門研修2年目（SR2）習得目標

基本的診療能力（コアコンピテンシー）

指導医の監視のもと、別記の事項（図1）が効率的かつ思慮深くできる。

基本的知識と技能知識：障害受容、社会制度など。

技能：高次脳機能検査、装具処方、ブロック療法、急変対応など指導医の監視のもと、研修。カリキュラムでAに分類されている評価・検査・治療の大部分を実践でき、Bに分類されているものの一部について適切に判断して、専門診療科と連携できる。

詳細は研修カリキュラムを参照

専門研修3年目（SR3）では、カンファレンスなどでの意見の集約・治療方針の決定など、チーム医療におけるリーダーシップを発揮し、患者さんから信頼される医療を実践できる姿勢・態度を習得します。またリハビリテーション分野の中で8領域の全ての疾患を経験できているかを意識して研修する必要があります。指導医は日々の臨床を通して専攻医の知識・技能習得を指導します。専攻医は学会での発表、研究会への参加、DVDなどを通して自らも専門知識・技能習得の拡充を図ってください。

図3 専門研修3年目（SR3）習得目標

基本的診療能力（コアコンピテンシー）

指導医の監視なしでも、別記の事項が迅速かつ状況に応じた対応ができる。

基本的知識と技能

知識社会制度、地域連携など技能：住宅改修提案、ブロック療法、チームアプローチなど。

指導医の監視なしでも、研修カリキュラムでAに分類されている評価・検査・治療について中心的な役割を果たし、Bに分類されているものを適切に判断し専門診療科と連携でき、Cに分類されているものの概略を理解し経験している。

詳細は研修カリキュラムを参照

3) 研修の週間計画および年間計画

基幹施設（山形大学病院リハビリテーション科）

	月	火	水	木	金	土	日
7:00-8:00 整形外科術前カンファレンス							
8:00-8:30 整形外科病棟カンファレンス参加							
8:15-9:00 整形外科病棟回診							
9:00-12:00 リハ外来							
8:00-9:00 心リハカンファレンス							
8:20-8:40 ICU/HCU カンファレンス							
8:20-8-40 リハミーティング							
17:00-18:00 脳外科カンファレンス（月1回）							

連携施設（山形県立河北病院）

	月	火	水	木	金	土	日
8:00-8:30 整形外科カンファレンス							
16:30-17:30 整形外科病棟カンファレンス							
9:00-12:00 整形外科、病棟回診							
9:00-12:00 整形外科外来見学							
16:00-17:00 内科リハカンファレンス							
8:20-8:40 ICU/HCU カンファレンス							

連携施設（至誠堂総合病院）

	月	火	水	木	金	土	日
8:30-8:45 院内症例検討会							
14:30-15:00 リハ科病棟カンファレンス							
9:30-11:00 リハ科病棟総回診							
14:00-16:00 リハ外来							
9:00-9:15 リハ科スタッフ会議							

連携施設（独立行政法人国立病院機構山形病院）

	月	火	水	木	金	土	日
16:00-17:00 リハカンファレンス							
16:00-16:30 高次脳カンファレンス							
8:15-9:00 リハ病棟回診							
9:00-12:00 リハ外来							
14:00-15:00 嚥下検査							

連携施設（三友堂リハビリテーションセンター）

	月	火	水	木	金	土	日
9:30-12:00 摂食、嚥下外来							
13:30-14:30 多職種合同カンファレンス参加							
14:30-16:00 ボトックス外来							
9:00-12:00 装具診							
15:20-16:00 嚥下検査							
15:00-16:00 嚥下検査							

連携施設（鶴岡協立リハビリテーション病院）

	月	火	水	木	金	土	日
8:30-9:00 院内症例検討会・勉強会							
9:00-12:00 リハ外来							
9:00-12:00 病棟回診							
9:30-11:00 食事診察・カンファレンス							
13:30-14:00 嚥下検査							
14:00～ 装具外来							
14:00～ 電気生理検査							
14:00～ カンファレンス							
16:00～ 嚥下外来							
17:00～18:00 医局会議・抄読会							
16:00～ 嚥下外来							
17:00～ 嚥下カンファレンス							

連携施設（山形徳洲会病院）

	月	火	水	木	金	土	日
14:20-14:40 病棟カンファレンス①							
15:15-15:30 病棟カンファレンス②							
13:30-14:00 難病病棟カンファレンス							
13:00-14:00 整形外科カンファレンス							
9:00-12:00 リハ外来							
14:00-15:00 リ リハ科訪問診療							
15:30-16:30 ポトックス外来							
17:00- 整形外科装具外来							
15:00- リハ科装具外来							
8:30-8:45 リハ科ミーティング							

連携施設（山形県立こども医療療育センター）

	月	火	水	木	金	土	日
14:00-17:00 装具診							
13:30-14:10 リハビリ科内会議							
14:00-17:00 症例会議（不定期）							
16:30-17:15 摂食検討会							

山形大学病院研修プログラムに関連した全体行事の年度スケジュール

月	全体行事予定
4	SR1：研修開始。研修医および指導医に提出用資料の配布 (山形大学病院ホームページ) 指導医・指導責任者：前年度の指導実績報告用紙の提出 SR3 修了者：専門医認定一次審査書類を日本専門医機構リハビリテーション 科研修委員会へ提出 研修プログラム管理委員会開催
6	日本リハビリテーション医学会学術集会参加(発表)(開催時期は要確認)
7	SR3 修了者：専門医認定二次審査(筆記試験、面接試験)
10	SR1、SR2、SR3：指導医による形成的評価とフィードバック(半年ごと) 次年度専攻医募集開始(山形大学病院ホームページ)
11	SR1、SR2：次年度研修希望施設アンケートの提出(研修プログラム管理委員会宛) 次年度専攻医内定
12	日本リハビリテーション医学会学術集会演題公募(12~1月)(詳細は要確認)
3	当年度の研修終了 研修プログラムプログラム連携委員会開催(研修施設の上級医・専門医・専門研修指導 医・多職種の評価を総括) SR1、SR2、SR3：研修目標達成度評価報告用紙と経験症例数報告用紙の作成(年次報告) 指導医・指導責任者：指導実績報告用紙の作成 (書類はSR1、SR2分は翌月に提出、SR3分は当月中に提出) 研修プログラム管理委員会開催(SR3研修終了の判定)

3. 専攻医の到達目標（修得すべき知識・技能・態度など）

- 1) 専門知識知識として求められるものには、リハビリテーション概論、機能解剖・生理学、運動学、障害学、リハビリテーション関連領域疾患の知識などがあります。それぞれの領域の項目に、A. 正確に人に説明できる必要がある事項からC. 概略を理解している必要がある事項に分かれています。詳細は研修カリキュラムを参照してください。
- 2) 専門技能（診察、検査、診断、処置、手術など）専門技能として求められるものは、（1）脳血管障害、外傷性脳損傷など（2）脊髄損傷、脊髄疾患（3）骨関節疾患、骨折（4）小児疾患（5）神経筋疾患（6）切断（7）内部障害（8）その他（廃用症候群、がん、疼痛性疾患など）の8領域にわたります。それぞれの領域の項目に、A：自分一人でできる／中心的な役割を果たすことができる必要がある事項から、C：概略を理解している、経験している必要がある事項に分かれています。詳細は研修カリキュラムを参照してください。
- 3) 経験すべき疾患・病態（研修カリキュラム参照）
- 4) 経験すべき診察・検査等（研修カリキュラム参照）
- 5) 経験すべき手術・処置等（研修カリキュラム参照）
- 6) 習得すべき態度基本的診療能力（コアコンピテンシー）に関する事で、「2. リハビリテーション科専門研修はどのようにおこなわれるのか2）年次毎の専門研修計画、および6. 医師に必要なコアコンピテンシー、倫理性、社会性などについて」の項目を参照ください。
- 7) 地域医療の経験
「7. 施設群による研修プログラムおよび地域医療についての考え方の項」を参考にしてください。

本研修プログラムでは、基幹施設と連携施設それぞれの特徴を生かした症例や技能を広く、専門的に学ぶことができます。

4. 各種カンファレンスなどによる知識・技能の習得

- 1) カンファレンスは、チーム医療を基本とするリハビリテーション領域では、研修に関わる重要項目として位置づけられます。情報の共有と治療方針の決定に多職種がかかわるため、カンファレンスの運営能力は、基本的診療能力だけでなくリハビリテーション医に特に必要とされる資質となります。
- 2) 基幹施設および連携施設それぞれにおいて医師および看護師・リハビリテーションスタッフによる症例カンファレンスで、専攻医は積極的に意見を述べ、医療スタッフからの意見を聴き、ディスカッションを行うことにより、具体的な障害状況の把握、リハビリテーションゴールの設定、退院に向けた準備などの方策を学びます。
- 3) 基幹施設と連携施設による症例検討会：稀な症例や多方面からの検討を要する症例、教訓的な症例は2-3か月に一度、大学内の施設を用いて検討を行います。
- 4) 学会・地方会などに向けた予演会や、各施設の専攻医や若手専門医による研修発表会も行い、発表内容、スライド資料の良否、発表態度などについて指導的立場の医師や同僚・後輩から質問をうけて討論を行います。
- 5) 各施設において抄読会や勉強会を実施します。リハビリテーションは世界の文化や制度の違いにより大きく異なるので、英文抄読が広い知識の修得に有用となっています。また、リハビリテーション関連の洋書の輪読会を通して、様々なリハビリテーション医療の実際についても学びます。専攻医は最新のガイドラインを参照するとともにインターネットなどによる情報検索も行います。
- 6) 症例数の少ない分野においては日本リハビリテーション医学会が発行する病態別実践リハビリテーション研修会のDVDなどを用いて自主的に学びます。
- 7) 日本リハビリテーション医学会の学術集会、リハビリテーション地方会などの学術集会、その他各種研修セミナーなどで、下記の事柄を学んで下さい。各病院内で実施されるこれらの講習会にも参加してください。
 1. 標準的医療および今後期待される先進的医療
 2. 医療安全、院内感染対策
 3. 指導法、評価法などの教育技能

5. 学問的姿勢について

専攻医は、医学・医療の進歩に遅れることなく、常に研鑽、自己学習することが求められます。患者の日常的診療から浮かび上がるクリニカルクエスチョンを日々の学習により解決し、今日のエビデンスでは解決し得ない問題は臨床研究に自ら参加、もしくは企画する事で解決しようとする姿勢を身につけます。学会に積極的に参加し、基礎的あるいは臨床的研究成果を発表します。得られた成果は論文として発表し、公に広めると共に批評を受ける姿勢が必要となります。

リハビリテーション科専門医資格を受験するためには以下の要件を満たす必要があります。

「本医学会における主演者の学会抄録2篇を有すること。2篇のうち1篇は、本医学会地方会における会誌掲載の学会抄録または地方会発行の発表証明書をもってこれに代えることができる。」となっています。

6. 医師に必要なコアコンピテンシー、倫理性、社会性などについて

医師として求められる基本的診療能力（コアコンピテンシー）には態度、倫理性、社会性などが含まれています。内容を具体的に示します。

1) 患者や医療関係者とのコミュニケーション能力

医療者と患者の良好な関係をはぐくむためにもコミュニケーション能力は不可欠となり、医療関係者とのコミュニケーションもチーム医療のために必要となります。基本的なコミュニケーション能力は初期臨床研修で取得すべき事項ですが、患者さんの障害受容などのコミュニケーションとなると非常に高度です。心理状態への配慮も必要となり、専攻医の技術として身に付けることが求められます。

2) 医師としての責務を自律的に果たし信頼されること

医療専門家である医師と患者を含む社会との契約の意味を十分に理解し、患者、家族から信頼される知識・技能および態度を身につける必要があります。

3) 診療記録の適確な記載ができること

診療行為を適確に記述することは、初期臨床研修で取得されるべき事項ですが、リハビリテーション科は診療技術に重点が置かれるのと同時にコミュニケーションにも重点が置かれる医療であるため、診療記録を的確に記載する必要があります。

4) 患者中心の医療を実践し、医の倫理・医療安全に配慮すること

障害のある患者・認知症のある患者などを対象とすることが多く、倫理的配慮が必要となります。また、医療安全の重要性を理解し事故防止、事故後の対応がマニュアルに沿って実践することが求められます。

5) 臨床の現場から学ぶ態度を修得すること

臨床の現場から学び続けることの重要性を認識し、その方法を身につけるようにします。

6) チーム医療の一員として行動すること

チーム医療の必要性を理解しチームのリーダーとして活動できることが求められます。他の医療スタッフと協調して診療にあたることができるばかりでなく、治療方針を統一し、治療の方針を、患者に分かりやすく説明する能力が求められます。また、チームとして逸脱した行動をしないよう、時間遵守などの基本的な行動も要求されます。

7) 後輩医師に教育・指導を行うこと

自らの診療技術、態度が後輩の模範となり、また形成的指導が実践できるように、学生や初期研修医および後輩専攻医を指導医とともに受け持ち患者を担当してもらい、チーム医療の一員として後輩医師の教育・指導にも参加します。

7. 施設群による研修プログラムおよび地域医療についての考え方

1) 施設群による研修

本研修プログラムでは山形大学病院を基幹施設とし、地域の連携施設とともに病院施設群を構成してします。専攻医はこれらの施設群をローテーションすることにより、多様で偏りのない充実した研修を行うことが可能となります。これは専攻医が専門医取得に必要な経験を積むことに大変有効です。リハビリテーションの分野では、大まかに8つの分野に分けられますが、様々な診療科にまたがる疾患が多く、さらに障害像も多彩です。急性期から回復期、維持期（生活期）を通じて、1つの施設で症例を経験することは困難です。さらには、行政や地域医療・福祉施設と連携をして、地域で生活する障害者を診ることにより、リハビリテーションの本質も見えてきます。

このため、地域の連携病院では多彩な症例を多数経験することで医師としての基本的な力を獲得することを目指します。また、医師としての基礎となる課題探索能力や課題解決能力は一つ一つの症例について深く考え、広く論文収集を行い、症例報告や論文としてまとめることで身につけます。このことは臨床研究のプロセスに触れることで養われます。このような理由から施設群で研修を行うことが非常に大切です。本研修プログラムのどの研修病院を選んでも指導内容や経験症例数に不公平が無いように十分に配慮します。

施設群における研修の順序、期間等については、専攻医を中心に考え、個々の専攻医の希望と研修進捗状況、各病院の状況、地域の医療体制を勘案して、専門研修プログラム管理委員会が決定します。

2) 地域医療の経験

1. 当病院の研修に限らず、連携施設での研修中にも、通所リハビリテーション、訪問リハビリテーションなど介護保険事業、地域リハビリテーション等に関する見学・実習を行い、急性期から回復期、維持期における医療・福祉分野にまたがる地域医療・地域連携を経験できます。
2. ケアマネージャーとのカンファレンスの実施、住宅改修のための家屋訪問、脳卒中パスや大腿骨頸部骨折パスでの病診・病病連携会議への出席など、疾病の経過・障害にあわせたりハビリテーションの支援について経験できるように配慮しています。
3. 医療過疎地区という意味での地域実習は基本的にありませんが、地域の巡回相談事業（補装具や福祉相談）に同行できるようスケジュールを調整します。

8. 施設群における専門研修計画について

図4に山形県リハビリテーション科研修プログラムの研修コース例を示します。SR1は基幹施設、SR2は連携施設、SR3の後半では基幹施設に戻ってくる研修です。症例等で偏りの無いように、専攻医の希望を考慮して決められます。本プログラムでは全ての連携施設は山形県内にあり、山形中心地からの転居せずに通勤することも可能です。

図4 山形県リハビリテーション科研修プログラムのコース例

SR1	SR2	SR3
山形大学附属病院 リハビリテーション科	連携施設	関連施設 山形大学附属病院 リハビリテーション科
領域 1) 脳血管障害・外傷性脳損傷など 2) 脊椎脊髄疾患・脊髄損傷 3) 骨関節疾患・骨折 4) 小児疾患 5) 神経筋疾患 6) 切断 7) 内部障害 8) その他(廃用症候群、がん、疼痛性疾患など)	領域 1) 脳血管障害・外傷性脳損傷など 2) 脊椎脊髄疾患・脊髄損傷 3) 骨関節疾患・骨折 5) 神経筋疾患 6) 切断 7) 内部障害 8) その他(廃用症候群、がん、疼痛性疾患など)	領域 1) 脳血管障害・外傷性脳損傷など 2) 脊椎脊髄疾患・脊髄損傷 3) 骨関節疾患・骨折 4) 小児疾患 5) 神経筋疾患 6) 切断 7) 内部障害 8) その他(廃用症候群、がん、疼痛性疾患など)

図5～7に上記研修プログラムコースでの3年間の施設群ローテーションにおける研修内容と予想される経験症例数を示します。どのコースであっても内容と経験症例数に偏り、不公平がないように十分配慮します。

本研修プログラムの研修期間は3年間としていますが、修得が不十分な場合は修得できるまでの期間を延長することになります。一方で、サブスペシャリティ領域専門医取得を希望される専攻医には必要な教育を開始し、また大学院進学希望者には、臨床研修と平行して研究を開始することを奨めます。

図5 SR1における研修施設の概要と研修カリキュラム

研修レベル (施設名)	研修施設における診療内容概要	専攻医の研修内容	経験予定症例数
SR1 山形大学 附属病院	<p>指導医数 2 名</p> <p>病床数 637 床 外来数 50 症例/週 特殊外来 装具 5 症例/週 高次脳機能障害 2 症例/週</p> <p>(1)脳血管障害・外傷性脳損傷等 (2)脊椎脊髄疾患・脊髄損傷 (3)骨関節疾患・骨折 (4)小児疾患 (5)神経筋疾患 (6)切断 (7)内部障害(呼吸器、心血管) (8)その他：がんリハ</p>	<p>専攻医数 2 名</p> <p>担当病床数 0 床 担当外来数 10 症例/週 特殊外来 装具 5 症例/週 高次脳機能障害 1 症例/週</p> <p>基本的診療能力 (コアコンピテンシー)</p> <p>指導医の助言・指導のもと、別記の事項が実践できる。</p> <p>基本的知識と技能 知識：運動学、障害学、ADL/IADL, ICF など 技能：全身管理、リハビリ処方、装具処方など</p> <p>上記の評価・検査・治療の概略を理解し、一部を実践できる。</p>	<p>(1)脳血管障害・外傷性脳損傷等(急性期) 30 症例 (2)脊椎脊髄疾患・脊髄損傷 50 症例 (3)骨関節疾患・骨折 40 症例 (4)小児疾患 10 症例 (5)神経筋疾患 20 症例 (6)切断 5 症例 (7)内部障害 10 症例 (8)その他(廃用性、がんリハ) 10 症例</p> <p>電気生理学的診断 2 症例 言語機能の評価 2 症例 認知症・高次脳機能の評価 2 症例 摂食・嚥下の評価 2 症例 排尿の評価 2 症例 理学療法 100 症例 作業療法 50 症例 言語聴覚療法 30 症例 義肢 20 症例 装具・杖・車椅子など 20 症例 訓練・福祉機器 5 症例 摂食嚥下訓練 5 症例 ブロック療法 10 症例</p>

図6 SR2における研修施設の概要と研修カリキュラム

研修レベル (施設名)	研修施設における診療内容概要	専攻医の研修内容	経験予定症例数	
SR2 至誠堂総合 病院	<p>指導医数 3 名</p> <p>病床数 230 床 外来数 50 症例/週 特殊外来 装具 4 症例/週 高次脳機能障害 1 症例/週</p> <p>(1)脳血管障害・外傷性脳損傷等 (2)脊椎脊髄疾患・脊髄損傷 (3)骨関節疾患・骨折 (4)小児疾患 (5)神経筋疾患 (6)切断 (7)内部障害(呼吸器、心血管) (8)その他：がんリハ</p>	<p>専攻医数 0 名</p> <p>担当病床数 5 床 担当外来数 2 症例/週 特殊外来 装具 2 症例/週 高次脳機能障害 1 症例/週</p> <p>基本的診療能力 (コアコンピテンシー) 指導医の助言・指導のも と、別記の事項が実践でき る。 基本的知識と技能 知識：運動学、障害学、 ADL/IADL、ICF など 技能：全身管理、リハビリ 処方、装具処方、など 上記の評価・検査・治療の 概略を理解し、一部を実践 できる。</p>	<p>(1)脳血管障害・外傷性脳損傷等 (急性期) (2)脊椎脊髄疾患・脊髄損傷 (3)骨関節疾患・骨折 (4)小児疾患 (5)神経筋疾患 (6)切断 (7)内部障害 (8)その他(廃用性、がんリハ)</p> <p>電気生理学的診断 言語機能の評価 認知症・高次脳機能の評価 摂食・嚥下の評価 排尿の評価 理学療法 作業療法 言語聴覚療法 義肢 装具・杖・車椅子など 訓練・福祉機器 摂食嚥下訓練 ブロック療法</p>	<p>30 症例</p> <p>50 症例 40 症例 0 症例 20 症例 5 症例 10 症例 10 症例</p> <p>0 症例 2 症例 2 症例 2 症例 0 症例 80 症例 80 症例 20 症例 5 症例 20 症例 5 症例 5 症例 5 症例</p>

研修レベル (施設名)	研修施設における診療内容概要	専攻医の研修内容	経験予定症例数	
SR2 県立河北 病院	<p>指導医数 1 名</p> <p>病床数 180 床 外来数 15 症例/週 特殊外来 装具 5 症例/週 高次脳機能障害 2 症例/週</p> <p>(1)脳血管障害・外傷性脳損傷等 (2)脊椎脊髄疾患・脊髄損傷 (3)骨関節疾患・骨折 (4)小児疾患 (5)神経筋疾患 (6)切断 (7)内部障害(呼吸器、心血管) (8)その他：がんリハ</p>	<p>専攻医数 1 名</p> <p>担当病床数 0 床 担当外来数 10 症例/週 特殊外来 装具 3 症例/週 高次脳機能障害 1 症例/週</p> <p>基本的診療能力 (コアコンピテンシー) 指導医の助言・指導のも と、別記の事項が実践でき る。 基本的知識と技能 知識：運動学、障害学、 ADL/IADL、ICF など 技能：全身管理、リハビリ 処方、装具処方、など 上記の評価・検査・治療の 概略を理解し、一部を実践 できる。</p>	<p>(1)脳血管障害・外傷性脳損傷等 (急性期) (2)脊椎脊髄疾患・脊髄損傷 (3)骨関節疾患・骨折 (4)小児疾患 (5)神経筋疾患 (6)切断 (7)内部障害 (8)その他(廃用性、がんリハ)</p> <p>電気生理学的診断 言語機能の評価 認知症・高次脳機能の評価 摂食・嚥下の評価 排尿の評価 理学療法 作業療法 言語聴覚療法 義肢 装具・杖・車椅子など 訓練・福祉機器 摂食嚥下訓練 ブロック療法</p>	<p>15 症例</p> <p>10 症例 30 症例 0 症例 2 症例 1 症例 10 症例 10 症例</p> <p>2 症例 2 症例 2 症例 2 症例 2 症例 50 症例 20 症例 15 症例 1 症例 20 症例 2 症例 5 症例 5 症例</p>

研修レベル (施設名)	研修施設における診療内容概要	専攻医の研修内容	経験予定症例数	
SR2 国立病院機 構山形病院	指導医数 3 名 病床数 308 床 外来数 10 症例/週 特殊外来 装具 2 症例/週 高次脳機能障害 1 症例/週 (1)脳血管障害・外傷性脳損傷等 (2)脊椎脊髄疾患・脊髄損傷 (3)骨関節疾患・骨折 (4)小児疾患 (5)神経筋疾患 (6)切断 (7)内部障害(呼吸器、心血管) (8)その他：廃用症候群	専攻医数 1 名 担当病床数 5 床 担当外来数 2 症例/週 特殊外来 装具 1 症例/週 高次脳機能障害 1 症例/週 基本的診療能力 (コアコンピテンシー) 指導医の助言・指導のも と、別記の事項が実践で できる。 基本的知識と技能 知識：運動学、障害学、 ADL/IADL、ICF など 技能：全身管理、リハビ リ処方、装具処方、など 上記の評価・検査・治療 の概略を理解し、一部を 実践できる。	(1)脳血管障害・外傷性脳損傷等 (急性期) (2)脊椎脊髄疾患・脊髄損傷 (3)骨関節疾患・骨折 (4)小児疾患 (5)神経筋疾患 (6)切断 (7)内部障害 (8)その他(廃用性、がんリハ)	10 症例 2 症例 3 症例 3 症例 5 症例 1 症例 1 症例 1 症例 電気生理学的診断 1 症例 言語機能の評価 1 症例 認知症・高次脳機能の評価 1 症例 摂食・嚥下の評価 1 症例 排尿の評価 0 症例 理学療法 20 症例 作業療法 20 症例 言語聴覚療法 10 症例 義肢 1 症例 装具・杖・車椅子など 2 症例 訓練・福祉機器 1 症例 摂食嚥下訓練 1 症例 ブロック療法 1 症例

研修レベル (施設名)	研修施設における診療内容概要	専攻医の研修内容	経験予定症例数	
SR2 三友堂 リハビリテ ーション センター	指導医数 1 名 病床数 120 床 外来数 50 症例/週 特殊外来 装具 3 症例/週 摂食嚥下 4 症例/週 ボトックス 2 症例/週 (1)脳血管障害・外傷性脳損傷等 (2)脊椎脊髄疾患・脊髄損傷 (3)骨関節疾患・骨折 (4)神経筋疾患 (5)切断 (6)内部障害(呼吸器、心血管)	専攻医数 2 名 担当病床数 10 床 担当外来数 2 症例/週 特殊外来 装具 3 症例/週 摂食嚥下 2 症例/週 ボトックス 2 症例/週 基本的診療能力 (コアコンピテンシー) 指導医の助言・指導のも と、別記の事項が実践で できる。 基本的知識と技能 知識：運動学、障害学、 ADL/IADL、ICF など 技能：全身管理、リハビ リ処方、装具処方、など 上記の評価・検査・治療 の概略を理解し、一部を 実践できる。	(1)脳血管障害・外傷性脳損傷等 (急性期) (2)脊椎脊髄疾患・脊髄損傷 (3)骨関節疾患・骨折 (4)神経筋疾患 (5)切断 (6)内部障害 (7)その他(廃用性、がんリハ)	70 症例 20 症例 40 症例 20 症例 4 症例 30 症例 20 症例 電気生理学的診断 2 症例 言語機能の評価 20 症例 認知症・高次脳機能の評価 20 症例 摂食・嚥下の評価 30 症例 排尿の評価 10 症例 理学療法 100 症例 作業療法 100 症例 言語聴覚療法 50 症例 義肢 4 症例 装具・杖・車椅子など 20 症例 訓練・福祉機器 30 症例 摂食嚥下訓練 30 症例 ブロック療法 10 症例

研修レベル (施設名)	研修施設における診療内容概要	専攻医の研修内容	経験予定症例数	
SR2 鶴岡協立 リハビリテ ーション 病院	<p>指導医数 1 名</p> <p>病床数 156 床 外来数 50 症例/週 専門外来 嚥下外来 5 症例/週 高次機能障害 2 症例/週</p> <p>(1)脳血管障害・外傷性脳損傷等 (2)脊椎脊髄疾患・脊髄損傷 (3)骨関節疾患・骨折 (4)小児疾患 (5)神経筋疾患 (6)切断 (7)内部障害(呼吸器、心血管) (8)その他：廃用、がん</p>	<p>専攻医数 1 名</p> <p>担当病床数 5~10 床 担当外来数 15 症例/週 専門外来 嚥下外来 2 症例/週 高次機能障害 1 症例/週</p> <p>基本的診療能力 (コアコンピテンシー) 指導医の助言・指導のもと、別記の事項が実践できる。 基本的知識と技能 知識：運動学、障害学、ADL/IADL、ICF など 技能：全身管理、リハビリ処方、装具処方、など 上記の評価・検査・治療の概略を理解し、一部を実践できる。</p>	<p>(1)脳血管障害・外傷性脳損傷等(回復期) 50 症例 (2)脊椎脊髄疾患・脊髄損傷 5 症例 (3)骨関節疾患・骨折 20 症例 (4)小児疾患 0 症例 (5)神経筋疾患 10 症例 (6)切断 2 症例 (7)内部障害(呼吸器、心血管) 10 症例 (8)その他：廃用、がん 10 症例</p> <p>電気生理学的診断 2 症例 言語機能の評価 50 症例 認知症・高次脳機能の評価 50 症例 摂食・嚥下の評価 50 症例 排尿の評価 30 症例 理学療法 100 症例 作業療法 100 症例 言語聴覚療法 50 症例 義肢 3 症例 装具・杖・車椅子など 20 症例 訓練・福祉機器 5 症例 摂食嚥下訓練 80 症例</p>	

図7 SR3における研修施設の概要と研修カリキュラム

研修レベル (施設名)	研修施設における診療内容概要	専攻医の研修内容	経験予定症例数	
SR3 山形徳洲会 病院	<p>指導医数 1 名</p> <p>病床数 292 床 外来数 10 症例/週 特殊外来 装具 5 症例/週</p> <p>(1)脳血管障害・外傷性脳損傷等 (2)脊椎脊髄疾患・脊髄損傷 (3)骨関節疾患・骨折 (4)小児疾患 (5)神経筋疾患 (6)切断 (7)内部障害(呼吸器、心血管) (8)その他：がんリハ</p>	<p>専攻医数 2 名</p> <p>担当病床数 0 床 担当外来数 5 症例/週 特殊外来 装具 1 症例/週</p> <p>基本的診療能力 (コアコンピテンシー)</p> <p>指導医の助言・指導のもと、別記の事項が実践できる。</p> <p>基本的知識と技能 知識：運動学、障害学、ADL/IADL, ICF など 技能：全身管理、リハビリ処方、装具処方など</p> <p>上記の評価・検査・治療の概略を理解し、一部を実践できる。</p>	<p>(1)脳血管障害・外傷性脳損傷等(急性期) (2)脊椎脊髄疾患・脊髄損傷 (3)骨関節疾患・骨折 (4)小児疾患 (5)神経筋疾患 (6)切断 (7)内部障害 (8)その他(廃用性、がんリハ)</p> <p>電気生理学的診断 言語機能の評価 認知症・高次脳機能の評価 摂食・嚥下の評価 排尿の評価 理学療法 作業療法 言語聴覚療法 義肢 装具・杖・車椅子など 訓練・福祉機器 摂食嚥下訓練 ブロック療法</p>	<p>0 症例</p> <p>5 症例</p> <p>50 症例</p> <p>0 症例</p> <p>10 症例</p> <p>0 症例</p> <p>5 症例</p> <p>5 症例</p> <p>0 症例</p> <p>5 症例</p> <p>0 症例</p> <p>5 症例</p> <p>0 症例</p> <p>5 症例</p> <p>0 症例</p> <p>5 症例</p> <p>0 症例</p> <p>5 症例</p> <p>0 症例</p> <p>100 症例</p> <p>50 症例</p> <p>0 症例</p> <p>0 症例</p> <p>5 症例</p> <p>1 症例</p> <p>0 症例</p> <p>1 症例</p>

研修レベル (施設名)	研修施設における診療内容概要	専攻医の研修内容	経験予定症例数	
SR3 山形県立こども医療療育センター	<p>指導医数 0 名</p> <p>病床数 60 床 外来数 25 症例/週 特殊外来 装具 15 症例/週</p> <p>(1)骨関節疾患・骨折 (2)小児疾患 (3)神経筋疾患 (4)切断</p>	<p>専攻医数 1 名</p> <p>担当病床数 0 床 担当外来数 10 症例/週 特殊外来 装具 15 症例/週</p> <p>基本的診療能力 (コアコンピテンシー)</p> <p>指導医の助言・指導のもと、別記の事項が実践できる。</p> <p>基本的知識と技能 知識：運動学、障害学、ADL/IADL, ICF など 技能：全身管理、リハビリ処方、装具処方など</p> <p>上記の評価・検査・治療の概略を理解し、一部を実践できる。</p>	<p>(1)骨関節疾患・骨折 (2)小児疾患 (3)神経筋疾患 (4)切断</p> <p>理学療法 作業療法 言語聴覚療法 義肢 装具・杖・車椅子など 摂食嚥下訓練 ブロック療法</p>	<p>3 症例</p> <p>40 症例</p> <p>3 症例</p> <p>1 症例</p> <p>100 症例</p> <p>50 症例</p> <p>100 症例</p> <p>1 症例</p> <p>40 症例</p> <p>2 症例</p> <p>5 症例</p>

9. 専門研修の評価について

専門研修中の専攻医と指導医の相互評価は施設群による研修とともに専門研修プログラムの根幹となるものです。専門研修SRの1年目、2年目、3年目のそれぞれに、基本的診療能力（コアコンピテンシー）とリハビリテーション科専門医に求められる知識・技能の修得目標を設定し、その年度の終わりに達成度を評価します。このことにより、基本から応用へ、さらに専門医として独立して実践できるまで着実に実力をつけていくように配慮しています。

指導医は日々の臨床の中で専攻医を指導します。専攻医は経験症例数・研修目標達成度の自己評価を行います。指導医も専攻医の研修目標達成度の評価を行います。医師としての態度についての評価には、自己評価に加えて、指導医による評価、施設の指導責任者による評価、リハビリテーションに関わる各職種から、臨床経験が豊かで専攻医と直接かかわりがあった担当者を選んでの評価が含まれます。専攻医は毎年9月末（中間報告）と3月末（年次報告）に「専攻医研修実績記録フォーマット」を用いて経験症例数報告書及び自己評価報告書を作成し、指導医はそれに評価・講評を加えます。

専攻医は上記書類をそれぞれ9月末と3月末に専門研修プログラム管理委員会に提出します。指導責任者は「専攻医研修実績記録フォーマット」を印刷し、署名・押印したものを専門研修プログラム管理委員会に送付します。「実地経験目録様式」は、6か月に1度、専門研修プログラム管理委員会に提出します。自己評価と指導医評価、指導医コメントが書き込まれている必要があります。「専攻医研修実績記録フォーマット」の自己評価と指導医評価、指導医コメント欄は6か月ごとに上書きしていきます。

- ・ 3年間の総合的な修了判定は研修プログラム統括責任者が行います。この修了判定は専攻医が専門医試験の申請する上で必要となります。

10. 専門研修プログラム管理委員会について

基幹施設である山形大学病院には、リハビリテーション科専門研修プログラム管理委員会と、統括責任者を置きます。連携施設群には、連携施設担当者と委員会組織が置かれます。山形大学病院リハビリテーション科専門研修プログラム管理委員会は、統括責任者（委員長）、事務局代表者、および連携施設担当委員で構成されます。

専門研修プログラム管理委員会の主な役割は、①研修プログラムの作成・修正を行い、②施設内の研修だけでなく、連携施設へのお出張、臨床場面を離れた学習としての、学術集会や研修セミナーの紹介幹旋、自己学習の機会の提供を行い、③指導医や専攻医の評価が適切か検討し、④研修プログラムの修了判定を行い、修了証を発行することにあります。

基幹施設の役割基幹施設は連携施設とともに研修施設群を形成します。基幹施設に置かれた研修プログラム統括責任者は、総括的評価を行い、修了判定を行います。また、研修プログラムの改善を行います。

連携施設での委員会組織

専門研修連携施設には、専門研修プログラム連携施設担当者と委員会組織を置きます。専門研修連携施設の専攻医が形成的評価と指導を適切に受けているか評価します。連携施設担当者は専門研修連携施設内の委員会組織を代表し、専門研修基幹施設に設置される専門研修プログラム管理委員会の委員となります。

1 1. 専攻医の就業環境について

専門研修基幹施設および連携施設の責任者は、専攻医の労働環境改善に努めます。専攻医の勤務時間、休日、当直、給与などの勤務条件については、労働基準法を遵守し、各施設の労使協定に従います。さらに、専攻医の心身の健康維持への配慮、当直業務と夜間診療業務の区別とそれぞれに対応した適切な対価を支払うこと、バックアップ体制、適切な休養などについて、勤務開始の時点で説明を行います。

研修年次毎に専攻医および指導医は専攻医研修施設に対する評価も行い、その内容は専門研修プログラム管理委員会に報告されますが、そこには労働時間、当直回数、給与など、労働条件についての内容が含まれます。

1 2. 専門研修プログラムの改善方法

本研修プログラムでは、より良い研修プログラムにするべく、専攻医からのフィードバックを重視してプログラムの改善を行うこととしています。

1) 専攻医による指導医および研修プログラムに対する評価専攻医は、年次毎に指導医、専攻医研修施設、研修プログラムに対する評価を行います。また、指導医も専攻医研修施設、研修プログラムに対する評価を行います。専攻医や指導医等からの評価は、質問紙にて行い、専門研修プログラム管理委員会に提出され、研修プログラムの改善に役立てられます。このようなフィードバックによって研修プログラムをより良いものに改善していきます。専門研修プログラム管理委員会は改善が必要と判断した場合、専攻医研修施設の実地調査および指導を行います。評価にもとづいて何をどのように改善したかを記録し、毎年3月31日までに日本専門医機構のリハビリテーション科研修委員会に報告します。

2) 研修に対する監査（サイトビジット等）・調査への対応

研修プログラムに対して日本専門医機構からサイトビジット（現地調査）が行われます。その評価にもとづいて専門研修プログラム管理委員会で研修プログラム

の改良を行います。研修プログラム更新の際には、サイトビジットによる評価の結果と改良の方策について日本専門医機構のリハビリテーション科研修委員会に報告します。

1 3. 修了判定について

3年間の研修機関における年次毎の評価表および3年間のプログラム達成状況にもとづいて、知識・技能・態度が専門医試験を受けるのにふさわしいものであるかどうか、症例経験数が日本専門医機構のリハビリテーション科研修委員会が要求する内容を満たしているものであるかどうか、研修出席日数が足りているかどうかを、専門医認定申請年(3年目あるいはそれ以後)の3月末にプログラム統括責任者または研修連携施設担当者が専門研修プログラム管理委員会において評価し、プログラム統括責任者が修了の判定をします。

1 4. 専攻医が研修プログラムの修了に向けて行うべきこと

修了判定のプロセス

専攻医は「専門研修プログラム修了判定申請書」を専門医認定申請年の4月末までに専門研修プログラム管理委員会に送付する必要があります。専門研修プログラム管理委員会は5月末までに修了判定を行い、研修証明書を専攻医に送付します。専攻医は日本専門医機構のリハビリテーション科研修委員会に専門医認定試験受験の申請を行います。

1 5. 研修プログラムの修了について

専門研修基幹施設

山形大学病院リハビリテーション科が専門研修基幹施設となります。

専門研修連携施設

連携施設の認定基準は下記に示すとおり2つの施設に分かれます。2つの施設の基準は、日本専門医機構のリハビリテーション科研修委員会にて規定されています。

連携施設

リハビリテーション科専門研修指導責任者と同指導医（指導責任者と兼務可能）が常勤しており、リハビリテーション科研修委員会の認定を受け、リハビリテーション科を院内外に標榜している病院または施設です。

関連施設

指導医が常勤していない回復期リハビリテーション施設、介護老人保健施設、等、連携施設の基準を満たさないものをいいます。指導医が定期的に訪問するなど適切な指導体制を取る必要がある施設です。

専門研修連携施設

連携施設

1. 至誠堂総合病院リハビリテーション科（回復期病棟あり）
2. 山形県立河北病院
3. 独立行政法人国立病院機構山形病院
4. 三友堂リハビリテーションセンター（回復期病棟あり）
5. 鶴岡協立リハビリテーション病院（回復期病棟あり）

関連施設

1. 山形徳洲会病院リハビリテーション科
2. 山形県立総合療育センター

表 1 プログラムローテーション例

SR1	SR2		SR3	
12M	9M	3M	3M	9M
山形大学附属病院	至誠堂総合病院 (回復期:6M)	療育センター	山形徳洲会	山形大学附属病院
	鶴岡協立リハ病院 (回復期:6M)	療育センター	河北病院	
	三友堂リハセンター (回復期:6M)	療育センター	山形徳洲会	
	山形病院 (6M)	至誠堂総合病院 (回復期:6M)	療育センター	
	河北病院 (6M)	至誠堂総合病院 (回復期:6M)	療育センター	

本研修プログラムの施設群を構成する連携病院は以下の通りです。診療実績基準を満たしています。

1. 至誠堂総合病院リハビリテーション科
2. 山形県立河北病院
3. 独立行政法人国立病院機構山形病院
4. 三友堂リハビリテーションセンター
5. 鶴岡協立リハビリテーション病院
6. 山形徳洲会病院リハビリテーション科
7. 山形県立総合療育センター

山形大学リハビリテーション科と連携施設により専門研修施設群を構成します。

専門研修施設群の地理的範囲

本研修プログラムの専門研修施設群の多くは山形県の村山地区にありますが、置賜地区、庄内地区にも存在します。施設群の中には小児専門施設や地域中規模病院が入っています。

16. 専攻医受入数について

毎年3名を受入数とします。

各専攻医指導施設における専攻医総数の上限（3学年分）は、当該年度の指導医数×2と日本リハビリテーション医学会専門医制度で決められています。本研修プログラムにおける専攻医受け入れ可能人数は、専門研修基幹施設および連携施設の受け入れ可能人数を合算したものです。山形大学病院に1名、プログラム全体では11名の指導医が在籍しており、専攻医に対する指導医数は、十分余裕があり、専攻医の希望によるローテーションのばらつき（連携病院の偏り）に対しても充分対応できるだけの指導医数を有するといえます。また、受入専攻医数は病院群の症例数が専攻医の必要経験数に対しても十分に提供できるものとなっています。

17. サブスペシャリティ領域との連続性について

リハビリテーション科専門医を取得した医師は、リハビリテーション科専攻医としての研修期間以後にサブスペシャリティ領域の専門医のいずれかを取得できる可能性があります。リハビリテーション領域においてサブスペシャリティ領域である小児神経専門医、感染症専門医など（他は未確定）との連続性をもたせるため、経験症例等の取扱いは検討中です。

18. リハビリテーション科研修の休止・中断、プログラム移動、プログラム外研修の条件、大学院研修について

- 1) 出産・育児・疾病・介護・留学等にあっては研修プログラムの休止・中断期間を除く通算3年間で研修カリキュラムの達成レベルを満たせるように、柔軟な専門研修プログラムの対応を行います。
- 2) 短時間雇用の形体での研修でも通算3年間で達成レベルを満たせるように、柔軟な専門研修プログラムの対応を行います。
- 3) 住所変更等により選択している研修プログラムでの研修が困難となった場合には、転居先で選択できる専門研修プログラムの統括プログラム責任者と協議した上で、プログラムの移動には日本専門医機構内のリハビリテーション科研修委員会への相談等が必要ですが、対応を検討します。
- 4) 他の研修プログラムにおいて内地留学的に一定期間研修を行うことは、特別な場合を除いて認められません。特別な場合とは、特定の研修分野を受け持つ連携施設の指導医が何らかの理由により指導を行えない場合、臨床研究を専門研修と併せて行うために必要な施設が研修施設群にない場合、あるいは、統括プログラム責任者が特別に認める場合となっています。

- 5) 留学、臨床業務のない大学院の期間に関しては研修期間として取り扱うことはできませんが、社会人大学院や臨床医学研究系大学院に在籍し、臨床に従事しながら研究を行う期間については、そのまま研修期間に含めることができます。
- 6) 専門研修プログラム期間のうち、出産・育児・疾病・介護・留学等でのプログラムの休止は、全研修機関の3年のうち6か月までの休止・中断では、残りの期間での研修要件を満たしていれば研修期間を延長せずにプログラム修了と認定するが、6か月を超える場合には研修期間を延長します。

19. 専門研修指導医について

リハビリテーション科専門研修指導医は、下記の基準を満たし、日本リハビリテーション医学会ないし日本専門医機構のリハビリテーション科領域専門研修委員会により認められた資格です。

1. 専門医取得後、3年以上のリハビリテーションに関する診療・教育・研究に従事していること。但し、通常5年で行われる専門医の更新に必要な条件（リハビリテーション科専門医更新基準に記載されている、①勤務実態の証明、②診療実績の証明、③講習受講、④学術業績・診療以外の活動実績）を全て満たした上で、さらに以下の要件を満たす必要がある。
2. リハビリテーションに関する筆頭著者である論文1篇以上を有すること。
3. 専門医取得後、本医学会学術集会（年次学術集会、専門医会学術集会、地方学術集会のいずれか）で2回以上発表し、そのうち1回以上は主演者であること。
4. 日本リハビリテーション医学会が認める指導医講習会を1回以上受講していること。

指導医は、専攻医の教育の中心的役割を果たすとともに、指導した専攻医を評価することとなります。また、指導医は指導した研修医から、指導法や態度について評価を受けます。

指導医のフィードバック法の学習 (Faculty Development)

指導医は、指導法を修得するために、日本リハビリテーション医学会が主催する指導医講習会を受講する必要があります。ここでは、指導医の役割・指導内容・フィードバックの方法についての講習を受けます。指導医講習会の受講は、指導医認定や更新のために必須です。

20. 専門研修実績記録システム、マニュアル等について研修実績および評価の記録

日本リハビリテーション医学会ホームページよりダウンロードできる「専攻医研

修実績記録」に研修実績を記載し、指導医による形成的評価、フィードバックを受けます。総括的評価は研修カリキュラムに則り、少なくとも年1回行います。

山形大学リハビリテーション科にて、専攻医の研修履歴（研修施設、期間、担当した専門研修指導医）、研修実績、研修評価を保管します。さらに専攻医による専門研修施設および研修プログラムに対する評価も保管します。

研修プログラムの運用には、以下のマニュアル類やフォーマットを用います。これらは日本リハビリテーション医学会ホームページよりダウンロードすることができます。

1. 専攻医研修マニュアル
2. 指導者マニュアル
3. 専攻医研修実績記録フォーマット

「専攻医研修実績記録フォーマット」に研修実績を記録し、一定の経験を積むごとに専攻医自身が達成度評価を行い記録してください。少なくとも1年に1回は達成度評価により、学問的姿勢、総論（知識・技能）、各論（8領域）の各分野の形成的自己評価を行ってください。各年度末には総括的評価により評価が行われます。

指導医による指導とフィードバックの記録

専攻医自身が自分の達成度評価を行い、指導医も形成的評価を行って記録します。少なくとも1年に1回は学問的姿勢、総論（知識・技能）、各論（8領域）の各分野の形成的評価を行います。評価者は1（さらに努力を要する）の評価を付けた項目については必ず改善のためのフィードバックを行い記録し、翌年度の研修に役立たせます。

2 1. 研修に対するサイトビジット（訪問調査）について

専門研修プログラムの施設に対して日本専門医機構からのサイトビジットがあります。サイトビジットにおいては研修指導体制や研修内容について調査が行われます。その評価は専門研修プログラム管理委員会に伝えられ、プログラムの必要な改良を行います。

2 2. 専攻医の採用と修了について採用方法

専門研修プログラム管理委員会は、毎年7月から病院ホームページでの広報や研修説明会等を行い、リハビリテーション科専攻医を募集します。プログラムへの応募者は、10月末までに研修プログラム責任者宛に所定の形式の『山形県リハビリテーション科専門研修プログラム応募申請書』および履歴書、医師免許証の写し、保険医登録証の写し、を提出してください。申請書は(1)山形大学病院リハビリテ

ーション科の website (<http://www.yu-orthop.jp/group/rehabili.html>) よりダウンロード、(2) 電話で問い合わせ (023-628-5355)、(3) e-mail で問い合わせ (s-kan@msb.biglobe.ne.jp)、のいずれの方法でも入手可能です。原則として11月中に書類選考および面接を行います。採否については、12月に決定して本人に文書で通知します。

修了について

「13. 修了判定について」 を参照ください

